



『生きていること自体がすでに一歩進んでいる』 利用者は新たな自分に出会う。

地域活動支援センター みどり工房若林

◎施設長：今野真理子さん



― 被災後の旧事業所 ―



― 旧事業所の外観 ―

避難時

津波で施設は全流失。
冷静な判断と行動力で危機を
切り抜ける。

「みどり工房若林(仙台市若林区荒浜)」施設長の今野さんは、災害に対する勉強・準備を震災前から行っていました。その学びは活かされ、あの時、施設内は何1つ物が倒れることなく安全が確保され全員が無事でした。さらに施設は仙台市の沿岸部にあるため、津波が来ることを想定し、すぐに行動に移ったといいます。町内の指定避難所に移動する中、「広い公園の方が安全ではないか」など、様々な避難先の情報が流れていました。工房は最終的に内陸の小学校に避難し全員津波から逃れましたが、「あの時もし、地震の発生が工房からの帰宅時間だったら、利用者の自己判断で公園を選ぶ危険性があった」と恐怖と共に当時を振り返ります。

避難所生活では、利用者と職員に必要な情報を手に入れることが困難でした。利用者を安全に家族のもとに帰す手立てはあるのか、薬の確保はできるのか。情報の受信も発信もできなかったため、現場で確実な対策を立てる難しさを感じていました。その状況を打開するためにも、今野さんは積極的に小学校の職員や地域の人たちと共に、運営側に入っていく努力をし情報の共有に努めました。

「小学校での10日間の避難所生活では、厳しい状況の中、利用者がとても立派だった」と今野さんは言います。誰もが状況に混乱し不安が強い中、利用者は疾病と障害という生きづらさを抱えながらも高齢者の避難介助をしたり、炊き出し用の薪割り・火おこしを行い、携帯電話の扱いが苦手な高齢者に使い方を教えるなど、それぞれが出来得ることをしていました。支えてもらうだけでなく共に支えあう、それが避難所運営の鍵だと今野さんは話します。

再開前

新たな物件が見つけれない。
障害者への偏見が活動拠点
づくりをはばむ。

3月下旬、今野さんは利用者に荒浜の工房が流され戻るところがないことを伝えました。作業や居場所など全てを失いましたが、利用者の「工房を再建したい」という想いを受けて、職員はすぐに動き出しました。まずは、拠点となる物件を探しましたが、障害者に対する偏見の言葉を幾度も受けました。「利用者と一緒に不動産屋に行くと『障害者の施設には貸さない』と言われ、利用者の前で『障害者なんかに』って。あんな悲しい思いはもうしたくないです」と今野さんは言います。様々な苦労はありましたが、何とかビルの一角を借り受け、仮の活動拠点を得るに至りました。

変化

自分出来る役割を見出した
利用者。つらい体験の中でも、
大きなちからを得る。

震災後、利用者の考え方が大きく変わったと、今野さんは感じています。これまで自分を否定的に捉えがちだったが、震災を通し今自分が出来得る役割を見出し、自己肯定感が広がりました。「生きていること自体がすでに一歩進んでいる・ありがたい」と思うようになりました。つらい体験の中で見出した変化は、今後の利用者の人生にとって、代えがたい大きなちからになっています。